

# エステル的人生から学ぶ(3):神はあなたのことを覚えておられる

メッセージノート (2022.7.17)

## 1. みこころを求め続ける(エステル記 5:1-8)

- a. 荒布をまとい灰をかぶった絶望状態から、正装をして中庭に「立った」という表現には、彼女の信仰による決意を見る。
- b. この決意が、反動や一回きりの勢いでしたことなく、神からの確信と、導きから出たことは、エステルの王へのリクエストの仕方に現されている。
  - ・ エステルは、最初の王との謁見において、直ぐに自分の願いについて話さないで、今日、彼女が設ける宴会にハマンと列席して欲しいとだけ頼む(4)。どうしてだろうか？
    - 王にお願いする一番良いタイミングを計っていたのだと思われる。多くの高官がいる前で、しかも、王の支配力の強い場所でするよりも、自分のテリトリーで交渉した方が、やりやすいと考えたのではなからうか。
  - ・ そこで、その宴会に来た王は、もう一度エステルに何が欲しいのかと尋ねる(6)。その時、エステルは、7節で、「私が願い、望んでいることは、…」と言った後、一旦、言葉を止めている。それから、何か気持ちを立て直し、8節で「私が設ける宴会に、もう一度ハマンとご一緒にお越しく下さい。そうすれば、明日、私は王様のおっしゃったとおりいたします。」と答えている。この中断は、一体何を意味していたのだろうか？
    - エステルは、神のみこころを求めつつこの一大事に望んでいた。神が彼女に示されること以上でも、以下でもなく、言われるままに従ったのだ。彼女がこの時、意識を傾注していたことは、「主のみこころ」。「主よ、どう答えたら良いでしょう？」と祈り心で、上よりの知恵が与えられることを求めていると思われる。それが、このような応答で現れた。

詩篇 130:1-2,5-6<sup>1</sup> 深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。<sup>2</sup> 主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。…<sup>5</sup> わたしは主に望みをおき、わたしの魂は望みをおき、御言葉を待ち望みます。<sup>6</sup> わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして、見張りが朝を待つにもまして。(新共同訳)

箴言 21:1 王の心は、主の御手の中であって、灌漑用水の水の流れのように御心のままに導かれる。(現代訳)

◇ エステルのような姿勢で私たちが日々の生活を送っているだろうか？自分の信仰生活を振り返ってみよう。

## 2. 高ぶり怒りの危険(エステル記 5:9-14)

- a. **怒りの問題:** ハマンには、怒りの問題があった。「憤りに満たされた」(9)の「憤り」という言葉は、「激怒」や「毒」を意味する言葉で、放っておくと大変な問題を起こす。[例] 弟ヤコブに騙されたこと知った兄エサウが、ヤコブに怒りを燃やし、殺害しようと企んだ時に出てくる言葉(創世記 27:44)。パウロは、この怒りについて次のような注意を喚起する。

エペソ 4:26-27<sup>26</sup> 怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。<sup>27</sup> 悪魔にすきを与えてはなりません。(新共同訳)

- ・ このエペソ書は、詩篇4:4からの引用と思われるが、そこでは、単に「怒り」の感情のみならず、もっと広く精神的不安な状況を表す言葉が使われている。

詩篇 4:4 恐れかしこんで、主の前に立ちなさい。主に対して罪を犯してはいけません。寝床で、静かに思い巡らしなさい。

- 「恐れかしこむ」(ラガーズ)とは、震える、怒る、恐る、興奮する、慌てるという意味。感情を抑えることができない怒りや悲しみも含めた言葉で、そのような精神状態の時は、気をつけて、神の前に静まり、祈れという。

箴言 4:23 何よりも、あなたの心を守りなさい。心は生活全体に影響を与えるからです。(LB)

◇ 心穏やかでない時、言わなくてよいことを言ってしまうたり、やってしまったことではないか？

- b. **高ぶりの問題:** 王ばかりでなく、王妃にも厚遇されたと勘違いし、上機嫌で帰宅するハマンであったが、モルデカイを見

たことにより、気分は、殺意へと一変する。どうして、そこまで怒ったのか？

- ・ ハマンは、「モルデカイを見なければならぬ間は、これら一切のこと[成功]も私には何の役にも立たない」と言っているが、どこまで権力を広げれば、満足するのだろうか。箴言 16:18 には、このようにある。

**箴言 16:18-20** 高ぶりは滅びにさきだち、誇る心は倒れにさきだつ。へりくだって貧しい人々と共にいるのは、高ぶる者と共にいて、獲物を分けるにまさる。慎んで、み言葉をおこなう者は栄える、主に寄り頼む者はさいわいである。

**ピリピ 2:3** 何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。

- ・ 怒りや高ぶりの問題は、意識がどこに向かっているか：高慢や怒りを抱える人は、常に自分のことしか考えていない。
- ・ モルデカイの態度が気に入らないハマンと彼の関係者たちは、この横柄さから致命的な行動に出ることになる。
  - 「高さ五十キュビトの柱を立てさせて、明日の朝、王に話して、モルデカイをそれにかけるようにしなさい。それから、王と一緒に、喜んでその宴会にお出かけなさい」には、シュシャンの建物は、最高でも40キュビトだったから、どこからも見えたし、王妃の宴会場からもモルデカイのぶざまな姿を見るつもりだった。しかし、そのようにはことは進まない。

### 3. 神の摂理(エステル記 6 章)

- a. **神の絶妙なタイミング**：5:7で、エステルは、一旦会話を中断してから、二度目の宴会の提案をしたが、その理由は、私たちには理解できなかったが(神がエステルにまだ語るなど言われたのであろう)、その一日の延期の間に、神は驚くことをなされる。
- ・ 王の眠られぬ夜ために、神は特別な用意があった。あの王殺害計画を阻止させたモルデカイに、なんの褒美も提供していなかったことが判明する。
  - ・ そこに、そのモルデカイを処刑する許可を得ようと、ハマンが入って来る。最悪のタイミング!高慢とうぬぼれに心が占有されていたハマンは、墓穴を掘ることになる。このタイミングこそ、生きて働かれる神のなさる業、神の摂理である。
    - 神は、主を信頼する者たちのことを決して忘れてはおられないし、必ず正義を行われるのである。

**箴言 3:11** 神のなされることは皆その時にかなって美しい。

- 原語の順で訳すと「すべてのことを 神はなされる 美しく 時にかなって」となる。確かにその通りである。

◇ あなたの人生において、まさにそうだと同意できる出来事はなかっただろうか？

- b. **大逆転**：「王が栄誉を与えたいと思う者とは、私以外にだれがいるだろう」なんといううぬぼれであろうか。傲慢で僭越な王への要求は、すべてモルデカイのものとなる。王服、王の冠、王の馬を要求するなどということは、普通では考えられない横柄な態度で、ハマンの精神状態がまともではなかったと思われる。記録によると、アルタシャスタ王が、テリバズスという家臣に栄誉を表すのに、王のマントを与えたが、そのマントを着ることは禁じたとある(『アルタシャスタ伝』)。
- ・ ここから、ハマンの形勢が逆転していく。静かに神の導きを待っていたエステルが、主導権を握っていく。

**哀歌 3:22-26** <sup>22</sup> 主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。 <sup>23</sup> それは朝ごとに新たになる。「あなたの真実はそのほど深い。 <sup>24</sup> 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い わたしは主を待ち望む。 <sup>25</sup> 主に望みをおき尋ね求める魂に 主は幸いをお与えになる。 <sup>26</sup> 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。(新共同訳)

### まとめ

- ・ 今日の箇所から、あなたが一番心に残ったシーンはどこか？それは、あなたの今の人生にどんな意味を持っているか？
- ・ 高ぶりの危険について、何か思い当たることはないか？
- ・ あなたのことを見守り続けておられる神に信頼し、みこころを求め続けたエステルの生き方から何を学ぶか？